

月輪中の兎

Remeis 天文臺長 故エルンストハルトウイツヒ

月輪中の暗い影が兎の形をして居ると言ふ見方は東洋では古くからあるが、西洋では今迄なかつた。此程、先年なくなつた獨逸のハルトウイツヒ博士が此事に關して興味ある詩的な文章を發表してゐるので、それを翻譯する事にした。——
Veröffentlichungen der Remeis-Sternwarte zu Bamberg 1923 より——(荒木亭譯)

月輪の上に現はれる多くの黒い班紋は、いつの時代に於ても、眞面目にも冗談にも色々な幻像マボロシを結びつけられたものである。例へば月世界に於ける人間であると言つて見たり、月の顔の形であると言つたり、或ひは又地球上の國々の映つた像であるを考へたりした。

古い昔に既にそう考へられてゐたのであるが、現今ではあまり一般的に知られてゐない様に思はれる一つの月面の像がある、それは月面の右側に見られる黒い班紋を兎のかたちを考へるものである。印度人の間では月のことを、彼等の聖語、即ちサンスクリットで Tschandra といふ外に shashin なる名がある。これは兎といふ意味の shasha なる言葉から出て來た「兎を所有するもの」といふ意味である。

私がかつて1869年から1870年の間の學期にシュピーゲル教授の許で三人の言語學者と共にサンスクリットを聴講してゐた時、ある日の講讀中にこの言葉、即ち shashin といふ語に出會つたことがあつた。シュピーゲル教授の説明によるに、多分月輪の表面に兎に似たかたちがあるに相違なからうと言はれて、天文學上そういふものが見えるかどうか聞かれたが、當時私はただそういふものはないと答へた。それから三十年の後、私は六月のある澄み渡つた満月の夜レマイス天文臺の兩方のドームの間をつなぐ橋の上に立つて、さうしたら明るい、觀測の邪魔になる月光のあるところで天體の美觀を充分に見極め得るだらうかと考へをめぐらしてゐた。そして

私は月輪をじつこ見つめてゐたら、突然そんなにびつくりした事だらう、シュピーゲル教授がかつて豫想された月輪中の兎が見まがふ可くもなくはつきりこ見えたではないか。そこで私は澤山の書物をさがして shashin さいふ名の載つてゐる場所を見出さうとしたが駄目だった。私の質問でサンクリット研究者の仲間から shashin さいふ名の用いてある物語りがあるさいふこは聞かされたが、その書いてある所を知るこは出来なかつた。が遂に1916年たまたま大學の名譽教授としての義務から當時の分科大學顧問官ガイガー教授の宅に招待された時、問題の物語りが見つかるまでその家を去らずに、さうさうその場所を Pantschatantra さいふ名のこころこ出てゐるのを見出した。

1900年私が兎のかたちを見てから後のここだがバリーで萬國世界博覽會が催された時、天文學者會議が開かれたが、その時光學室で二枚の大きな月面の圖を見た。その一つには兎のかたちが、他の一つには南半球から見たもので、坐つてゐるむく犬の像か黒い班點のこころにあてはめて書かれてゐた。私は質問をして見たけれど、天文學者達は Pantschatantra の物語りを知つてはゐなかつた。この兎の像は月面の最も暗い部分、即ちクリシウム海(危機の海)を耳に、フォエクンデイダーテイス海(豐饒の海)を頭に、トランクスリイターテイス海(靜穩海)を胸部に、セレニターテイス海(晴明の海)を後體に、ネクタリイテイス海を前脚に、ヴァポールム海(蒸氣の海)を後脚にしてあるそして最初の四分一の時から満月時までに見えるものである。私は月輪を最初の四分一のすぐ後こ満月の際(圖)に天文寫眞にまつたがこの班點は大變よく見られる。この寫眞の右側の圖で兎の像の輪廓をつけておいた。これは誰でも折がいゝこ肉眼でた易く月表面に認めるここが出来た。この暗い班點に對してつけた海の名稱は有名なダンチツヒの天文學者ヘーベル氏によつて、彼は1647年始めて有用な月面圖を出版した人で、地球上の海こは幾分異つた意味をもつべきではあるが他にこの暗黒點に比較すべきものがないから、海さいふ名を撰んだ人である。1899以來私は天文臺を訪れる幾千の人々に、この肉眼で認め得る兎の像を見せて來たが、いつもそれをよく了解してもらつたものである。

Pantschatantra に表はれてゐる物語は、約5000年も昔の時代に於て、唯



一の又最も古い證據であるから非常に重要なものである。即ち月はかゝる長い間既に地球の同じ側に向つてゐるものであつて、又その事から既にその時代に於ても月の自轉の時間は月が地球の周圍をめぐる公轉の時間と丁度等しいといふ重要な法則が成り立つてゐたものであり、又月の相貌が太古の時代常に晴れ渡つた空のあつた東方諸國に於て映つたのさ少しも變つてゐないのである。古い昔の月表面の圖は甚だ稀であつて、ガリライ以前の時代には殆んきなかつた。

さて私はこゝに此の物語をルードウイツミフリツエ氏の翻譯によつてお知らせしよう。しかしこの前に一寸言つておきたい事は、このPantschatantra 物語は古い印度の「世才教科書」であつて、五部に編まれたお話や格言で書かれたもので當時の最も有名な意味深き思想のある本の一つである。

Pantschatantra 物語の第三部には鴉と梟との戦争の事が書いてある。鴉の王は梟の王の家來等が夜眠つてゐるところを襲撃し殺して、梟の王を退けて仕舞はうともくろんでゐた。でその方法として先づ大臣達と會議を始めた。その際王は鴉と梟との間の不和の原因を尋ねて次の様なわけのある

こゝがわかつた。全鳥類の王の選舉に梟が選ばれなくてはならぬといふのである。これに對して鴉はガルダといふ一羽の強大なる鳥がちやんこ王様さしてゐて、その鳥の名によつてのみ鳥類はその敵にうち勝つてゐるといふ事實を強く主張して反對したのである。こゝのいふのは、

もし氣高き方々が我等の主であつて、悪事にうき方なれば、
その方の名によつてのみ、安福を得るこゝが出来ぬ。
偉大なる御方を守る者には、素破らしい報ひがある。
月に仕ふる小兎共は、幸福に暮してゐる。

これについて昔あつたこゝを鴉は話した。

こゝある森に畜群の王をしてゐたチアトルダといふ名の四本の鋭牙を持つた大きな象がゐた。その地方には幾年も幾年も非常な旱魃が續いて、そのためにすべての植物は枯れ、沼や澤や湖はすっかり乾ききつて仕舞つた。で象共は王様に言つた、「王様、若い象たちは渴きのために大變苦しんでゐます。死にかゝつたものもあるし、さうさう死んで仕舞つたものもあります。できこゝか水のあるところを探しに行つて、子供達に元氣をつけてやりたいのですが」。王は長いこゝ考へてから言つた。「この國の中程の僻地に地下のガンガの水でいつも満ち溢れてゐる大きな湖が一つある。そこに我々は行かう」。

かくして、五つ晩こゝの進んで行つた後彼等はその湖についた。そこで彼等は大喜びで水の中に渡つて、日の入る頃立ち去らうとした。その時この湖のまはりの柔かい地面の中に無数の兎の孔があつたが、これらの孔はすべてそこらをついた象共によつてふみ壊されて仕舞つて、多くの兎もは脚や頭をふみ折られ、或るものは死んで仕舞ひ、他は命からがらやつこ死を免れた。

さて、象の群が去つて仕舞ふこゝ、自分等の住居をふみつぶされた兎共が途方にくれて集つて來た。或るものは脚を折られ、或るものは傷いた身體で血まみれになつて、又あるものは小供を殺されて仕舞つたのでおいおい泣きながら集つてお互に協議を始めた。彼等は泣き叫びながら言つた。「あゝ悲しい、もうすつかり駄目だ。象の奴等は他に行くこゝろが無いのだから、また何度も此處へやつて來るだらう。そしたら我々はもう滅亡だ。實

際こういふ事を人は言つてゐる、

象が俺達にただまわつただけでも、
俺等はぶち殺されて仕舞ふ。
毒蛇は香をかきながらやつて仕舞ふし、
悪人は敬ひながら、殿様は笑ひながら。

それだから一つ救済策を考へ出さなくてはならぬ。」

その時一匹が言つた。「我々は此の土地を見棄よう、そして異つた他の所に行かう。そうするより外に仕方が有るだらうか？ マニユー (Manu) に弔アサ (Vyasa) も言つて居るではないか。

家のためなら男一人位、村のためなら一家位ひは棄てられよう。
御國のためなら一村位ひ、が自身のためだつたら地球も棄てられる。
毎年毎年お米をつくり、家畜を飼ふた楽しい土地を、
棄てるさ言はれちや、危険千萬、命が危ぶない。
王様は一寸も御心配にならないのだ。
因つた際に役立つ様に人々は寶をためる、
その寶さへ、妻君を護るためには投げ出すものだ。
だが、自分自身が危い破目になるさ、
妻君には一厘もわけたがらないものだよ。」

それに對し他の一人が言つた。「だがやはり、父や祖父から受けついで来たこのところを突然去るさいふことは出来ないことだ。それで何か一つ良い方法を考へ出して、象の奴等が二度さ此處に來ない様にびづくりさせてやらなくちやならぬ、實際こんなことも言つてあるよ、

毒のない蛇でも頭を高く差し上げる、
頭の中のからくりが毒があらうがあるまいが持ち上げる様に出來てゐる。

今度は又他の一人が言つた。「そういふ事になるさ、象の奴等を驚かしてもう二度さ來ない様にするのが一番いい方法だ。これをやるには一人の巧みな使者が必要さなつて來る。さいふのは我等の王様である兎の Vidschayadatta 様が月輪中に住んで居られる。で偽りの使者が一人象の王のところに送られねばならぬ。そして命令を下して言ふに「月はこの湖に汝等の來るを禁ず。何んさなれば湖の周圍には余の臣下等あまた住みおればなり。」こう相手を信ぜしめるに充分な言葉で告げられるならば、多分象の王も參つて仕舞ふだらう。」

するさ又一人が言ふに。「さあ、そうなるさ、我々の中にランバカルト (長

耳) さいふ名前の兎がゐる。あれは言葉の使い方もうまいし、使者の役目で知つて居ねばならぬこともすべて心得てゐる。彼を象の許に送らねばならぬ。こういふことも言つてある、

麗しくも能辯で、あらゆる點で賢くて、慾氣の少しもない、

他人の意見をすぐ推量出来る者は王様の使者になり得る、

殿様の貪慾な愚鈍な玄關番に頼る奴は、

恐らくは全くのうそつきで、終りはいゝ事はありはせぬ。

でこの不幸から脱れられるかぎうかやつて見ようではないか」

今一人がその時言つた。「成る程、それが一番いゝ、我々の命を救ふためにはこれより他に方法はない、そいつを一つやつて見よう」

かくして、長耳君が象の王のところに使ひに行く様に定つて、出掛けて行つた。彼は象共の居るところに近づくさ、象共にはやつて來られない場所に登り上つて、象の王に向つて言つた。「汝奸惡なる象よ、汝は如何なる氣にて愉快けに、恐るゝところもなく、かの月の湖におもむきたるか？汝は彼の湖に近づく可らず」。象はこれを聞いて不審に思つて尋ねた。「だが、一體お前は何者だ？」兎は答へて、「俺は Vidschayadatta さいふ兎で、月の世界に住むものだ。言ふも畏きお月様はその御言葉の數々をお前達に知らせんために、俺をお前達の所につかはされたのだ」。そこで象が答へて言ふは、「ではお月様の御命令に早速従ふから、その命令をくわしく知らせて呉れ」。

兎は答へて、「この間、汝は家來共を引きつれてあの湖に來た時、汝等は多くの兎をふみ殺した。それらの兎が余の臣下であることを知らないのか？で汝の命に係はるこゝだから、どんな事があつても二度あの湖に行つてはならぬ、さいふ御命令だ」。象が言ふに、「ではお月様は何處に居られるのか？」

兎は答へた。「お月様は今あの湖に滞在して居られて、お前達から傷けられてまだ生きてゐる兎達をなぐさめて居られる。で私をお前の許におつかはしになつたのだ」。

象は言つた。「それなら、お月様を見せてくれ、そしたらわたしはお月様に服従してごこか他の處に行かう」。兎は言つた。「よろしい、では一人で來て

くれ。お前にお月様を見せて上げよう!」

かくして兎は夜になつてから象をつれて湖の岸に来て、水に映つた月の像をさして言つた。「御覽ん、我々のお月様が深い考へにふけつて水の中に居られる。だからお前もお月様に服従して急いで歸れ、そうしないで、もしお前がお月様が靜かに考へ込んで居られるのを邪魔でもしたら、それこそつご大變にお怒りになるだらう!」

象はたまけて仕舞ひ、決してさういふ事はしないと言つて逃げ歸つて、二度もこの湖にやつて來ることは無くなつた。

兎共はその日から家族を一緒に楽しくその住居に落ち着くことが出來た。だから、

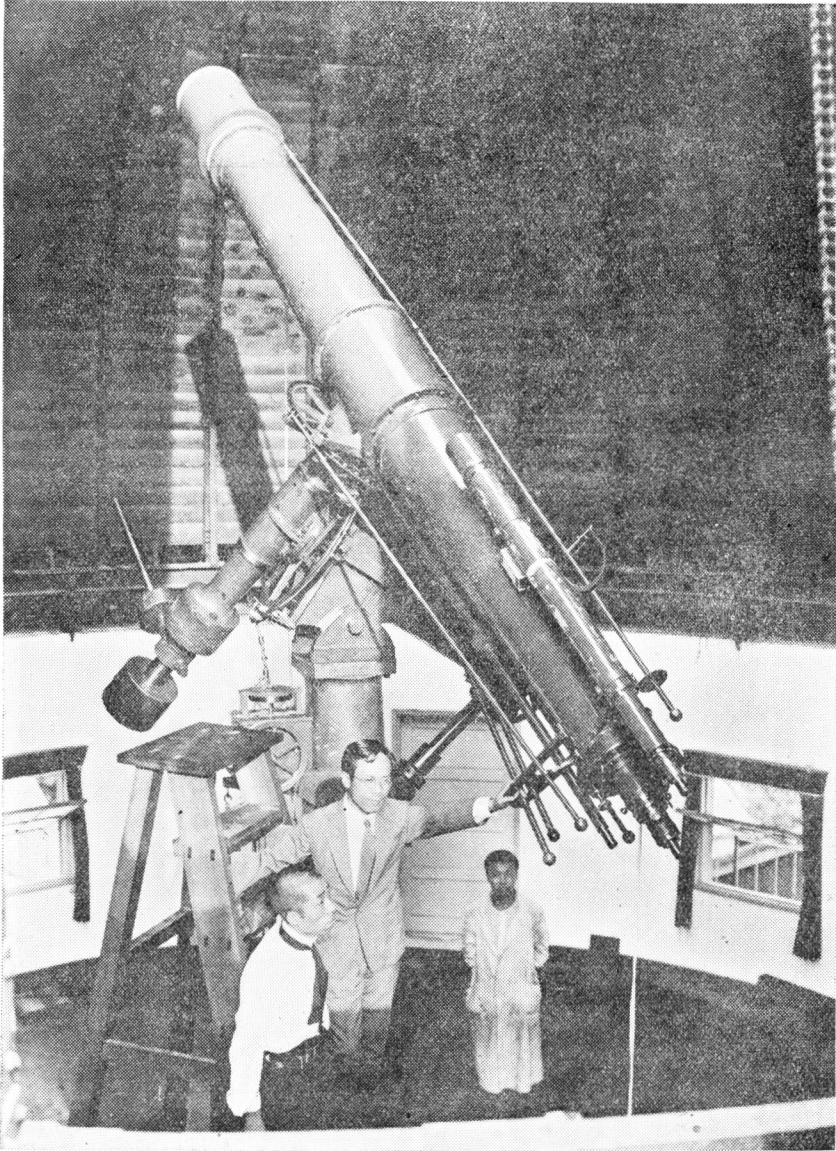
偉大なるお方を守る者には素破らしい報ひがある。

月に任ふる小兎共は、楽しく暮してゐる。

以上が月輪中の物語であるが、これを御話したのは、月に兎の像が見えるのを一般に知つてゐない天文學者のみならず、月輪中の shasha さいふ言葉にぎんなわけが有るかを知らないサンスクリット研究者にも、何にか役に立つであらうと思つてお報せしたのである。(完)

「クク十二時」を迎ふ(寫眞説明)

待たれた Cooke 12-inch 望遠鏡が來た。神戸へは去る 5 月 10 日着、京都へは 6 月 10 日着、7 月 11 日から大學天文臺の大ドーム内に据付け準備を始め、同 20 日に据付け完了、同 23 日には「北極への調整」(adjustment) を終つた。大レンズの口径 30 センチ、焦點距離 4 メートル半、之れに露帽とヒルガー分光機をとり付けるを、機械の全長は 6 メートルを超えてゐる。何と言つても之れが「日本第一」の屈折式望遠鏡には違ひ無い。久しく外國に遅れを取つてゐる我が國天文界の望遠鏡も、之れだけは人に見せて漸く恥かしからぬものと云ふことが出来る。機械は多分二十年も前に作られたものらしいけれど、最近に原作者クク會社の手に歸つて徹底的に修理と塗り換へが施され、照明装置其の他には思ひ切つた新意匠が加へられ、附屬の接眼レンズ中にはクク社最新試作の orthoscopic eye-piece が數個添えられてある。自働装置も「確實と安定」其のものである。—— 今後は京都の悪天氣と戦ひつゝ、此の機械は我日本を代表して學界に活躍するであらう。



京都大學天文臺に据えられた
「クク十二吋」大望遠鏡

(山本教授)

(上田助教授)

(中村要氏)



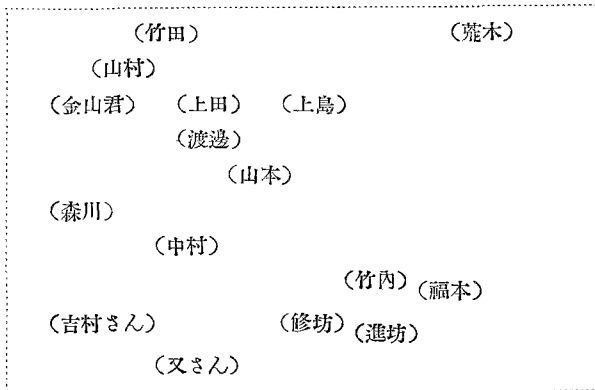
1927年7月20日

「クク十二吋」望遠鏡の歓迎會

京都大學天文臺の大ドームにて

「クク十二時」に攀ぢ登つた人々

毎日々々大ドームに馳け上つて、据え付けの終るのを「今か今か」を待ちかまへた連中は、いよいよ七月二十日午後二時、自動装置のチェーンに重垂の最後の一個が載せられる時を期して「望遠鏡 萬歳!!」を叫んだ。何よりも先づ紀念寫眞を撮らねばなるまいぞ。大階段に登るやら、望遠鏡の赤緯軸に登るやら、——伊藤君は早速カメラを用意して、ドームの長窓の外側からレンズの狙ひを定める。左の寫眞に掲げる人物は



寫眞のあまで、茶話會が此のドームの中で開かれたが、其の席へは杉原君も磯田君もニコニコ顔を出した。